

2009年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	漁獲		産地			輸入			輸出		
	スルメイカ	アカイカ	生	冷近	冷遠	アカイカ	マツイカ	コウイカ		調製品	
20	217.5	24.4	52.2	43.6	1.3	0.0	13.1	67.8	19.7	43.3	31.6
21	216.6	35.8	73.0	43.0	0.8	0.0	10.9	59.0	19.0	44.5	27.8
%	100	147	140	99	60	7	83	87	97	103	88

年	東京		在庫量			消費支出 生(イカ)	加工品			
	スルメイカ	甲イカ	スルメイカ	コウイカ	その他		イカ製品	イカ塩辛	干スルメイカ	燻製
20	12.4	4.3	0.6	50.5	8.1	3,115	34.2	22.45	10.34	11.81
21	13.2	4.3	0.4	46.8	6.2	2,900	34.6	22.5	7.614	11.17
%	106	99	60	93	76	93	101	100	46	95

年	産地		輸入		東京		消費支出 生(円)					
	スルメイカ	アカイカ	マツイカ	コウイカ	スルメイカ	甲イカ						
20	162	214	183	84	279	370	756	129	415	317	623	2,893
21	149	220	176	385	295	363	669	126	398	328	567	2,657
%	92	103	96	458	106	98	88	98	96	103	91	92

スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しており、本年もその水準の中での漁獲であった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、資源量は1980年代の終わりから増加傾向を示し、1996年には134万トンに達した。2009年の資源量は83万トンと推定された。親魚尾数は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には最大の15億尾であった。2009年級を産んだ親魚尾数は13億尾であった。現在の冬季発生系群の資源水準は過去30年間の資源量の推移から中位、動向は2005～2009年の5年間の変化から横ばいと判断されている。

秋生まれ群（秋季発生系群）の資源水準は、1980年代前半は減少傾向にあり、1980年代は主に50万トン前後（1981年～1989年の資源量の平均値は51.2万トン）、1986年には22.4万トンとなった。1980年代後半以降は増加傾向となり、1990年代の平均資源量は109万トン、2000年前後には主に150万～200万トンとなった。2004～2007年は100万トン前後に減少したが、2009年の資源量は149万トンに増加した。漁獲割合は1980年代に資源量の減少と共に上昇し、1980年代半ばには35%～40%となった。1990年代以降は資源量の増加と共に漁獲割合が低下し、近年は20%前後、2008年は燃油高騰の影響もあり、11%に低下している、といわれている。

なお、スルメイカの資源量は中長期的な海洋環境の変化によって変動すると考えられ、1990年代以降の資源の増大は、海洋環境がスルメイカにとって好適な状態に変化したためと判断されている。

産地水揚量と価格

21年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生7.3万トン（前年5.2万トン）、冷4.3万トン（前年4.4万トン）と生鮮は増加、冷凍は横ばいとなった。

TACに基づく漁業種別漁獲量はトロール4.5万トン（前年3.1万トン）、まき網1.35万トン（前年0.5万トン）、釣りの冷凍4.4万トン（前年4.6万トン）であったが、釣りがほぼ前年並み、トロールと巻き網はともに前年をかなり上回った。

冷凍は、本年も昨年同様当初北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）操業であったが、赤イカは年明け後の前年度漁期の最終航海が極めて好調に推移し、年度明けの初漁期も昨年同様好調で、水揚げも多かった。しかし、秋から冬場の漁は昨年同様極めて低調に推移した。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海4,289トン（前年6,374トン）、太平洋64,208トン（前年41,042トン）、オホーツク0トン（前年0トン）で、特に太平洋が増加、日本海が減少と好対照となったのが特徴である。また九州北部での漁獲は4,555トンで前年（4,264トン）を引続きやや上回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、その後は一部太平洋操業もみられたが、日本海操業が主体で漁獲量はほぼ前年並みであった。

また本年も業界では、従来からスルメイカー極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進、アカイカの高度利用等の指導は本年も続いた。

産地価格は、生鮮149円（前年：162円）、冷凍は220円（前年：214円）となり生鮮が下げ、冷凍が小幅上昇となった。

本年の特徴は、①本年の冷凍スルメイカは水揚げがほぼ前年並みであったが、IQF生産が前年より多かった、②本年の冷凍スルメイカ（R）のサイズ組成は、21～25尾サイズが22%で前年（28%）をやや下回り、26～30サイズも24%で前年（27%）をやや下回り、サイズ組成も20尾以下は20%で前年（22%）よりやや少なく、全体的に小型化が目立った、③AR、FORの漁場がなくなり、ペルー水域、NZ、ロシア等になり海外でのイカ類の漁獲はかなり少なくなっている、こと等である。

在庫量

21年は昨年より少ない6.4万トンの在庫から始まり、本年も例年通り6、7月に最低になったが、その数量は昨年を下回る3.3万トン前後であった。その後、秋以降は例年どおり増加に向かったが、国内生産量は前年並みであったものの、買い負けによる輸入の減少等もあって、在庫は減少した。この結果、越年在庫は5.8万トンと昨年を下回る在庫となった。平均在庫量も、4.7万トンで、前年（5万トン）をやや下回った。

消費地入荷量と価格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1.3万トン（前年1.2万トン）、冷凍4.3千トン（前年4.3千トン）であった。本年は太平洋生イカ漁が比較的順調であったことで生鮮の入荷が前年をやや上回った。価格は、生398円（前年415円）、冷328円（前年317円）で生が下げ・冷が若干上げた。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも引続き前年を下回った。

NZイカ

21年のNZイカ釣漁は、本年は2隻、0.8千トンで前年（2隻、1.4千トン）を下回った。
産地水揚量（全漁連）は、759トンで前年（1,267トン）を下回った。
価格は176円で前年（183円）をやや下回った。

アカイカ

本年も初漁期に昨年同様好調であったが、その後秋から冬にかけては昨年以上に極めて低調な漁模様であった。したがって中型船による近海操業は近年でも比較的高い水準の漁となった。また沖合（東経170度以東水域）の漁は1隻当たりの漁獲が中漁の部類に入る94トン（前年77トン）であった。小型船による近海での漁獲は昨年の28トンに比べると極端に少ない1トンの水揚げに終わった。

全漁連集計によると、生1トン（前年28トン）、冷1.1万トン（前年1.3万トン）であった。
産地価格は、生223円（前年108円）、冷295円（前年279円）であった。

海外アカイカは、ペルーのみ（200海里内）の操業であったが、4隻-27.3千トンで、昨年実績（4隻-14.1千トン）を大きく上回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下が98%（昨年は5尾以下98%）と昨年同様に超特大サイズに偏っていたが、今年は殊のほか（50%近く）1尾サイズのシェアが高く安値に終始した。

産地水揚量（全漁連）は、16,410トンでほぼ前年（13,578トン）を上回った。
価格は90円で前年（156円）を下回って推移した。

輸入イカ

21年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に5.9万トン前年（6.8万トン）を引続き下回った。

価格は、363円と引続き前年（370円）を下回り、平成の初頭並みの水準まで下がっている。

冷凍イカの主要輸入国は、中国23,683トン（前年30,144トン）、タイ6,871トン（前年8,116トン）、ベトナム5,502トン（前年6,818トン）、米国4,035トン（前年5,475トン）、フィリピン845トン（前年638トン）、インド1,322トン（前年1,047トン）、NZ1,449トン（前年3,345トン）、ペルー10,451トン（前年7,735トン）、アルゼンチン3,040トンで（前年10,421トン）相変わらず中国のシェアが高かったが、今年はペルーからの搬入が回復し（南米海域での好漁）したが、アルゼンチンからの搬入は引続き少なかった。

21年の輸出は、2.8万トンで前年（3.1万トン）をやや下回ったが、ペルー、中国の両国で2/3を占めている。

モンゴイカ

21年のコウイカの輸入は、1.9万トンで前年（2万トン）を若干下回った。
輸入価格は、669円で引続き前年（756円）を下回った。
東京消費地入荷量は、0.4千トンで前年（0.6千トン）を下回った。

価格は、567円で前年（623円）を輸入価格の下落を反映しやや下回ったが、近年コウイカの需要はかなり少なくなっている。